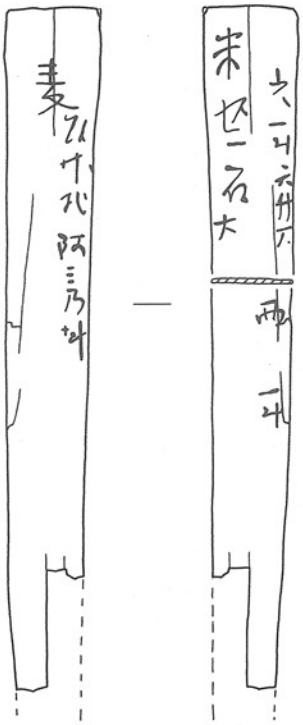
柾目の薄板の両面に墨書がある。下半は欠損している。形状は檜扇の橋の上半に似ており、転用された可能性がある。

薄板の表裏に米、麦などの穀物の種類と量を記載している。「西□」が粟と釈読できれば、表面には米と粟の量が書かれていることになる。裏面には、麦の量と「阿三陀料」と書かれている。調査地の東側右京四条一坊には、禅院寺の所在が推定されており、「阿三陀料」を阿弥陀料と読めば、寺院に関係した木簡の可能性がある。

9　関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和五六年度』（一九八二年）

（篠原豊一）



奈良文化財研究所『平城宮木簡六』の刊行

平城宮東区朝堂院南面から宮東南隅にかけての地域では、近年ダイナミックな官衙の変遷が明らかになっている。奈良時代後半には、壬生門と朝集殿院南門を結ぶ宮内道路の東西に、式部省・兵部省が対称に配置されたが、奈良時代前半の式部省はその東隣に位置していたことが、官衙内の井戸出土の木簡によって明らかになった。また、式部省の西隣への移転後その跡地には神祇官が建てられたことが、官衙配置や木簡をはじめとする出土文字資料によって解明されている。

本書は『平城宮木簡四』『同五』に続く、第三二次補足調査出土の式部省木簡（平城宮東南隅の南面大垣内側の東西溝出土）の完結編であるとともに、右記のような平城宮東南隅地域の解明に大きく寄与した第一五五次・第二二二次・第二七三次調査出土木簡を併せ、計二七八八点の木簡を収録する。

B4判コロタイプ図版一一二丁、A5判別冊解説付き、特製帙入り、本体価格二五〇〇〇円

（問い合わせ先）

㈱明新社　TEL　〇七四二―二三―三一一一

FAX　〇七四二―二六―〇〇九三